

中 学 校

平 成 5 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

国 語

東 京 都 教 育 委 員 会

平成 5 年 度

教 育 研 究 員 名 簿

	地 区	学 校 名	氏 名
◎	中 央 区	日 本 橋 中	古 山 真 樹
	江 東 区	第 三 大 島 中	小 松 昌 之
	大 田 区	貝 塚 中	金 子 芳 郎
	渋 谷 区	鉢 山 中	八 重 樫 ヒ サ 子
	杉 並 区	杉 森 中	坂 口 京 子
	北 区	桜 田 中	粕 谷 み ゆ き
○	板 橋 区	西 台 中	千 野 隆 司
	練 馬 区	豊 溪 中	井 上 敬 夫
	足 立 区	第 四 中	佐 野 稔
	葛 飾 区	奥 戸 中	飯 野 博 史
○	八 王 子 市	第 二 中	小 島 由 起 子
	三 鷹 市	第 二 中	赤 荻 千 恵 子
	昭 島 市	清 泉 中	赤 塚 義 知
	武 蔵 村 山 市	第 五 中	川 寄 貞 昭
	多 摩 市	多 摩 中	八 明 弘 江
	日 の 出 町	大 久 野 中	稲 村 豊

◎=世話人 ○=副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育課指導主事 新 藤 久 典

目 次

I	研究主題設定の理由	2
II	研究の構想	3
1	基本的な考え方	3
2	研究の方法	3
III	研究の内容	4
1	作文指導班	4
(1)	研究のねらい	4
(2)	指導の実際〔第1学年〕	5
(3)	研究のまとめ	12
2	音声言語指導班	14
(1)	研究のねらい	14
(2)	指導の実際1〔第1学年〕	15
(3)	指導の実際2〔第2学年〕	19
(4)	研究のまとめ	23
IV	研究のまとめと今後の課題	24

自己評価の力を高め、主体的な学習を促す指導法の工夫

I 研究主題設定の理由

本年度より新学習指導要領が全面実施された。「社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」を基本方針に「個性の尊重」「自己教育力の育成」などがその柱として掲げられている。

さらに、新しい学力観に基づいた評価の方法が提言され、これまでの知識・理解を中心とする学力から自ら学ぶ意欲や能力、思考力、判断力、表現力などの能力を中心とする学力への転換が求められている。具体的には、「一人一人のもつよさや可能性に着目し、それらを伸ばすための評価」「結果のみの評価ではなくそこにいたる過程の評価の重視」などが挙げられている。これらのことは、我々教師の発想の転換が迫られていることを意味する。これまでの終末中心の評価を改め、一斉指導、一問一答式の授業に偏らず、生徒が意欲をもち、主体的に取り組み、学習を組織的、系統的に追究していかなければならない。

同時に生徒も、国際化、価値観の多様化、高度な情報化社会などの急激な社会の変化の中で、判断力、選択能力といった自ら判断し、決定する能力が求められる。

こうした状況下で、現在の中学生の実態はというと、与えられたことはよくやり、やり方が分かると積極的に取り組む。しかし、自分の意志を人前ではっきりと表すことに苦手意識をもち、学習活動全般に受け身的な姿勢が目立つ。また、自ら課題をもって解決していくという意欲・態度が十分育っていない。さらに、表現する力の低下は否めない事実であり、話すこと、書くことへの抵抗感をもつ生徒が多い。自分の考えをまとめて発表する、自分の立場を明確にして書くといった活動を苦手としている。現在、自らの考えを相手の立場を理解して表現することが求められている時代・社会のなかで、深刻な問題として受け止める必要がある。

本研究では、国語教育の今日的課題や生徒の実態から、自己評価の力を高めていくことが大切であると考え、表現学習を通して、学ぶことへの意欲を喚起し、成就感を体得させ、自ら学ぼうとする力を育てるための指導の工夫を実践的に研究することとした。評価とは何よりも生徒の活動意欲を高めるものでなければならない。指導者に求められることは、生徒が自信をもって課題に取り組み、自分の課題を解決する過程に対する関心・意欲を高め、自分のもつよさを理解し、自分らしさを発揮できるようにすることである。また、生徒がどのようにすれば自分の考えを深め、課題を解決できるのかその方法に気付くことができるように助言・援助することである。このような活動の場を設定することにより、言語活動における主体性の育成が図られ、自ら主体的に学習に取り組む能力、態度が培われると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の構想

1. 基本的な考え方

本研究では、自己評価の力を次のようにとらえた。

「自分のものの見方や考え方を、他の者の評価をふまえながら振り返り、確かめ自信をもつことで、更に次の課題の解決へと向かわせることのできる能力と態度」

また、この考えに基づき、研究主題「自己評価の力を高め、主体的な学習を促す指導法の工夫」について、「主体的な学習を促す指導」を「自ら課題を設定し、解決していこうとする態度の育成」ととらえて、表現の領域から、作文指導、音声言語指導の2つの指導場面を取り上げ、2つの分科会を組織し、研究を進めることにした。さらに、各班は、次のような仮説を立て、授業研究を中心に仮説の実証を試みた。

[仮説]

<作文指導班>

○意見文の発想・選材の段階から相互評価を繰り返すことによって、自己評価の力を高めることができる。また自ら設定した課題を解決したという成成感、次に書く作文に対して積極的に立ち向かっていこうとする意欲を養うことにつながる。

<音声言語指導班>

○自分では評価しにくい音声言語活動を客観的に見つめ、適切に自己評価する力を身に付けさせることによって、自分の学習課題に気付き、主体的に学習する態度が養われる。

2. 研究の方法

本研究では、以下のような検証授業3回、実証授業3回を通して班ごとに仮説を実証するための研究を進めた。

[検証授業]

6月1日	武蔵村山市立第五中	3年『俳句・俳句の創作を通して』
6月25日	北区立桜田中	1年『表現一・分かりやすく説明する』
7月9日	日の出町立大久野中	2年『生活を見直す・事実を踏まえて』

[実証授業]

9月16日	練馬区立豊浜中	1年『作文について・戦争体験の聞き書き』
10月14日	大田区立貝塚中	1年『命ということ・感想発表会』
10月22日	足立区立第四中	2年『弁論大会に向けて』

この他に随時研究協議の場をもった。

Ⅲ 研究の内容

1. 作文指導班

(1) 研究のねらい

作文は一人一人の生徒が「このことについて書きたい」という意欲をもってすすめられるべき学習である。ところが、提示された題目に関して「何を書いたらいいのか」わからず、作文に苦手意識をもつ生徒は多い。これまでの作文指導は、構成や表現方法など叙述に関するものに重点がおかれがちであり、この最も重要な「何を書くのか」に関する指導は軽視されてきた。また評価についても、書き上げた作文に対しての教師からの一方的な評価が多く、「生徒自身が作文をどう考え、次の課題をどう見つけていくのか」といった「自己評価」はほとんど行われなかった。これは作文に意欲的に取り組む生徒が少ない現状の一因と考えられる。

そこで、作文指導班では、「作文を書き出す前の段階すなわち発想・选材を重視した指導」また「作文に対する自己評価の力を高める指導」にねらいを絞った。「自己評価の力」は前述のように「自分のものの見方や考え方を、他の生徒の評価をふまえながら振り返り、確かめ、自信をもつことで、更に次の課題の解決へと向かわせることのできる能力と態度」ととらえた。この自己評価の力を高める学習を「発想・选材の段階」に行うことで、生徒は「何をどのように書くのか」を明確にし、「書こう」という意欲をもって作文の授業に取り組んでいけるのではないか。また、作文が書き上がった段階での自己評価は、次の作文への課題を自分自身でみつけること、さらには、次の作文への意欲にもつながるのではないかと考えた。

具体的には、新聞記事を題材とした意見文を書く過程に、次のような相互評価・自己評価を行う学習活動を設定し、仮説に基づいてそれぞれのねらいを立てた。

① 〈発想・选材の段階でのクラス全体の題材の発表会〉

自分の興味をもった記事を選ぶことにより、意欲的に取り組ませることができる。また、他の生徒の発表を聞くことにより、自分の記事や意見を見直し、よりよい作文を書こうとする意欲を高めることができる。

② 〈意見文の案ができた段階でのグループの回し読み〉

他の生徒の指摘を参考にして、自分の意見文では「何をどのように書くのか」を更に明確にすることができる。

③ 〈書き上がった段階での意見文の回し読み〉

他の生徒の意見を参考にして、意見文の「良かった点」「自分で立てた目標は達成できたか」について考えることにより、「次の課題」を見つけることができる。

(2) 指導の実際〔第1学年〕

ア 指導目標

- ① それぞれの段階で評価し合う学習活動を通じて、自分の意見を客観的に判断する力を高める。
- ② 自らの課題を設定し、解決することで、次への課題に意欲的に取り組む態度を育てる。
- ③ 意見文を書くことを通して、発想・選材の力を高める。

イ 指導計画（6時間扱い）

〔事前〕

印象に残った新聞記事を切り抜き、その記事についての概要と、それに対する自分の意見を学習プリント①に記入する。

〔第一時〕

- ・生徒各自が選んだ記事の概要と、それに対する自分の意見を発表する。
- ・生徒が取り上げた記事を記録する一覧表（学習プリント②）に、発表された内容を簡単に記入する。

〈評価：様々な題材や意見があることに気付くことができたか〉

〔第二時〕

- ・発表続き（全員行う）
- ・作文の題材や言いたいことを決め、自分の今回の目標を設定する。（学習プリント③）

〈評価：自分が書きたいと思う題材を、決定することができたか〉

※発表を聞いて、自分の意見文の題材や考えを変更してもよい。

〔第三時〕（本時）

- ・小グループ（5～6名）で、記事と学習プリント③を回し読みする。
それぞれの題材やその意見を読み合い、自分の考えを書き込む。（学習プリント④）
- ・自分に返ってきた学習プリント④を読み、これから書く意見文にどう生かせるかを見直す。

〈評価：他の生徒の意見を参考に、自分が書こうとする意見文について、考えを深めることができたか〉

〔第四時〕

- ・各自が設定した目標に沿って意見文を書く。

〔第五、六時〕

- ・小グループでできあがった意見文を回し読みする。

- 他の生徒の意見文に対して、立場を明確にして自分の考えを書く。(学習プリント⑤)
 - 自分に返ってきた学習プリント⑤を読み、「目標は達成できたか」「自分の良かった点」「次回の目標」を記入する。
 - 小グループ内で、クラス全体に紹介したいと思う意見文を選び、発表する。
- <評価：自分の意見文を書くことに喜びをもち、次の作文を書こうとする意欲をもてたか>

ウ 評価

- 相互に評価し合うことを通して、自己評価の力を高め、主体的な学習をしていこうとする意欲と態度をもつことができたか。
- 新聞記事の中から広く題材を求め、他の生徒の意見をふまえた上で、自分の意見を組み立てられたか。
- 各自が設定した目標に向けて、意欲的に取り組むことができたか。

エ 指導の展開

(ア) 本時の目標

- 他の生徒の意見を取り入れながら、自分の考えを深める。
- 他の生徒の意見文の案を読み、自分の考えを書くことで、意見文の見方や考え方を深める。

(イ) 本時の展開

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> • 学習のねらい、主な学習活動を確認する。 • 学習プリント④を記入するについての注意事項を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の目標について知らせ、ねらいについて理解させる。 • 必ず良い点をさがし出すようにさせる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> • 小グループに分かれ、学習プリント①と③を回し読みする。 • 新聞記事の事実と、それに対する考えについて、良かった点(良く分かった点)、疑問点(分かりにくかった点)、自分なりの見方や考え方を学習プリント④に記入する。 • 書かれた考えを参考にして、自分の意見文に 	<ul style="list-style-type: none"> • 単に「良かった」「分からなかった」ではなく、具体的に書かせる。 • 一つの記事でも、見方によっては違った考え方があることに注意させる。 • 自分の意見文についてさらに深

展 開	生かせるコメントに赤線を引く。	<p>く考える糸口を、他の人のコメントの中から見つけられるようにさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> •他の人の意見を取捨選択し、自分の意見に取り入れることで、考えが深まることに気付かせる。
整理	<ul style="list-style-type: none"> •見直した点を、具体的に学習プリント④のDに記入する。 •本時の内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> •さらに資料収集などが必要な生徒については、個に応じた指導を行う。

(ウ) 評価

- 他の生徒の意見から、自分の考えを深めることができたか。
- 意見文に対する見方・考え方を深めることができたか。
- 意見文を書こうとする意欲が高まったか。

【参考資料1】取材メモ（学習プリント①）

月 日 () 刊 新聞
<div style="border: 1px solid black; width: 80%; margin: 0 auto; height: 150px;"></div>
コメント
<hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/> <hr style="border-top: 1px dotted black;"/>

新聞記事感想発表会意見用紙

1年()組()

氏名	記事内容	自らの感想、感想、メモ
1	台風17号	台風17号はすごい台風だ。被害は少なかったけれど、この日何かが起きるとしたら、被害はもっと大きくなる。みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
2	ごみ災害	ごみ災害は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
3	気象異常の犯人	気象異常の犯人は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
4	ジビットくんの冒険	ジビットくんの冒険は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
5	和食志向	和食志向は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
6	今だからこそ戦争を	今だからこそ戦争を、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
7	OL殺人ゆがみ	OL殺人ゆがみは、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
8	冷夏	冷夏は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
9	流れ星	流れ星は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
10	台風17号	台風17号は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
11	首相演説	首相演説は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
12	グループについて	グループについては、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
13	セコムが水	セコムが水は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
14	鹿児島のごう雨	鹿児島のごう雨は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
15	台風17号で電線が	台風17号で電線が、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
16	光るキ/コ	光るキ/コは、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
17	朱雀門の遺跡	朱雀門の遺跡は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
18	ツバモ住宅雑	ツバモ住宅雑は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
19	万引きビデオ販売	万引きビデオ販売は、みんなの命を守るために、みんなが協力して、被害を減らそう。
20		

(↑の方)と(↓の方)

【参考資料2】 発表会の各生徒の題材、意見等 (学習プリント②)

21	大げざきおわめみえ	初見も知らなかった、わたしも今度見てみたいと思ふ。
22	アニメの着かえちの戦	アニメはみんなにきょうみがあるから、わたしもアニメの着かえちの戦を見てみたいと思ふ。
23	野芝い40%値上げ	野芝はみんなにきょうみがあるから、わたしも野芝を見てみたいと思ふ。
24	奥尻異聞	奥尻はみんなにきょうみがあるから、わたしも奥尻を見てみたいと思ふ。
25	天然水	天然水はみんなにきょうみがあるから、わたしも天然水を見てみたいと思ふ。
26	鹿児島ごう雨	鹿児島ごう雨はみんなにきょうみがあるから、わたしも鹿児島ごう雨を見てみたいと思ふ。
27	骨粗鬆症	骨粗鬆症はみんなにきょうみがあるから、わたしも骨粗鬆症を見てみたいと思ふ。
28	眼下彩る光の競演	眼下彩る光の競演はみんなにきょうみがあるから、わたしも眼下彩る光の競演を見てみたいと思ふ。
29	宇宙人らいごうする	宇宙人らいごうするはみんなにきょうみがあるから、わたしも宇宙人らいごうするを見てみたいと思ふ。
30	角川たい補	角川たい補はみんなにきょうみがあるから、わたしも角川たい補を見てみたいと思ふ。
31	台風11号	台風11号はみんなにきょうみがあるから、わたしも台風11号を見てみたいと思ふ。
32	コピ-をけします	コピ-をけしますはみんなにきょうみがあるから、わたしもコピ-をけしますを見てみたいと思ふ。
33	日本区で103円台	日本区で103円台はみんなにきょうみがあるから、わたしも日本区で103円台を見てみたいと思ふ。
34	げかん先でなくし	げかん先でなくしはみんなにきょうみがあるから、わたしもげかん先でなくしを見てみたいと思ふ。
35	Miss南丁フリカ遊生	Miss南丁フリカ遊生はみんなにきょうみがあるから、わたしもMiss南丁フリカ遊生を見てみたいと思ふ。
36	浅利日本初の金メダル	浅利日本初の金メダルはみんなにきょうみがあるから、わたしも浅利日本初の金メダルを見てみたいと思ふ。
37		
38		

自分は何について書くか？
 議員バッチは全廃できるから、について。

【参考資料3】 意見文の題材、相互評価、自己評価の実際

(学習プリント③)

一 題材

氏名) _____

夫に励まして貰って11年目の初投票。

二 注目に具体例(事実・内容)。*新聞記事から

選挙権を得て11年、中学生の時から選挙権の確立でめでたかった病気がかりで、自分の選挙権は、
 第一杯だ、だが昨午投票して日々大急ぎで選挙権も選挙日
 前には大急ぎで決心して決まっていたけれど、当日は目
 分からず大急ぎで投票した。世の中がけだのツラさも
 味わってくれれば、という思いで投票した。

三 私の見解・主張。 選挙権は選挙権と書く
 ことはいふに、病気を抱えて下人でも、世の中が良
 くなるようにと投票する人もいる。理由もなく
 さげんしてしまふ人が多い。自分たちが代表
 と選ぶのに、無関心ではいけないと思う。

四 こんな意見文が書きたい。 *選挙権を愛する選挙権者
 志望人をたくす書きたい。

五 知りたいこと、調べたいこと。

(学習プリント④)

氏名) _____

A 良かった点

うまくなじめてあった。

自分の思い、ている事などがよくわかった。

選挙権についてよく知ることができた。

新聞記事の書きぶり、新聞の書きぶりがよくわかった。

選挙権の大切さをよく書いてあった。

B 疑問点(もどかしいこと、調べたいこと)

ない

選挙権のいみ

行なはな

病気を抱えて下人でも投票権はないのか。

なし

C 私はこう思うよ。

僕も国民の代表として投票したい。

選挙権を愛する選挙権者

選挙権を愛する選挙権者

選挙権を愛する選挙権者

D A・Cを参考に自分の意見文(文章)を見直そう。

選挙権についてよく知ることができた。

新聞記事の書きぶり、新聞の書きぶりがよくわかった。

選挙権の大切さをよく書いてあった。

(学習プリント⑤)

氏名) _____

A 納得した点、共感した所(良かった点)

病気を抱えて下人でも投票権があること。

選挙権の大切さをよく書いてあった。

新聞記事の書きぶり、新聞の書きぶりがよくわかった。

選挙権を愛する選挙権者

B 納得できなかった点、疑問点

投票したのに、他人の自由を奪うこと。

よくない

投票権を愛する選挙権者

選挙権を愛する選挙権者

C ②で自分の目標は達成できたか。

意見は述べたこと、書いたこと、思ったこと。

D 自分の意見文の良かった点は?

選挙権を愛する選挙権者

E 次回への目標は?

次回もよく書いてもらいたかったこと、選挙権を愛する選挙権者

選挙権を愛する選挙権者

選挙権を愛する選挙権者

【参考資料4】 第二段階の相互評価の実際

(学習プリント③)

二、題材

議員バッチは全廃できるか

三、注目したポイント

〇百余年の歴史を持つ議員バッチが全廃されるといふところ。

三、私の言いたいこと

日本人はバッチに弱い。学校だって委員バッチ等がある。バッチで人を決めるのではなく、中身が伴えばそれでいいじゃないか。

四、今までの作文を振り返って、私はこんな作文を書きたい。

言いたいことをずばり書いて、考えを伝えたい。余分なことを長々書かない。

五、もっと知りたい調べたい

※必要があれば書きなさい。

全廃になるとしたらいつなのか。

(政府は今、バッチのことなんかかまてられないみたいだから)

(学習プリント④)

A 良かった点

さんへ

内容

くわしく書いてあり、しかも自分の意見が出ている感じがした。
本当に議員バッチの是非をいらないよ。
高木さんは自分がいけんもきちんと言っていてとてもいいと思います。

名前

B 疑問点

内容

〇議員バッチはどうしてできたのたろう。
〇定期のたいな物にできないのか？
なんでそんなの必要なの？

名前

C 私はこう思うよ

内容

〇議員バッチを定めるのはいいと思う。
議員バッチは議員であることとしようめいする。
ためのものなのでなくさない方がいい。
〇そんなことならそんなバッチ、なんかあるとなくでモリロと

名前

D A・B・Cを参考にして自分の意見をもう一度見直してみよう。

〇の意見をとり入れて題材の内容がよく伝わるようにし、注目したポイントを際立たせて私の言いたい事を主張させる。
早くバッチはなくなればいいと思う。

議員バッチはなくてもいいと思う。

C おそろいのTシャツのなかに作れたいいんじや... 紙

【参考資料5】 第三段階の相互評価・自己評価の実際（学習プリント⑤）

完成した意見文を読んで

さんへ

A 賛成（共感した点）

自分もバッチを廃止してガイドなどに委ねた方がいいと思っ
た。最初はここのままでもいいと思っただけで、そのよう
な面へ用
とれていゝなら全廃してもいいかなと思っ
た。本気で議論する人は、もうはなしてほめてあげたい。
（
）
バッチはそんなにせりもどちでも作れるのに、なま
（
）
あんまりも、なくっていいよね。
バッチしてたあのバッチにすぎないのに。（
）
バッチはなくなればいいのに。（
）
本心にバッチはいらぬよ、なくすことなんかもあるしね。（
）

最初!! good!!
七行目の比喩を
七行目の議員に
をへま、
言っておきたい。

B 反対（納得できない点）

議員はバッチをつけたいと議員としての誇りが生まれないか
いふところへ。
胸に輝いてはかたたらう？

自己評価

A 目標は達成できたか

みんなの意見を読んで、廃止に賛成
してくれているので達成はできました。

B 自分の良かった点

意見をつけてかいている人が
いないのでひきつけてかけたところ

C 次回への目標

人が興味をもてくれて、感動する様な
作文を書きたい。
構成も細かく詳しく組み立てて、後悔しない
ような作文にする。

先生より

あなただけ議員バッチに関する考えかとして
も、はつまり書いてくれた文章も構成もし
バッチから人間の生々しく構えにもふれ
てあなただけで書いてくれたね。

ふり
し
て
ま
す。

(3) 研究のまとめ

何を書けばいいのか分からない生徒に、書きたいという意欲を起こさせるためにはどう指導したらいいのか。教師が題材を提示し、書き上げた作文を一方向的に評価するこれまでの指導では、この最も重要な点が見落とされがちであった。そこで作文指導班では、「意見文の発想・选材の段階から相互評価を繰り返すことによって、自己評価の力を高めることができる。また、自ら設定した課題を解決したという成就是、次に書く作文に対して積極的に立ち向かっていこうとする意欲を養うことができる。」という仮説を立て、研究を進めた。以下に今回の研究を通じて明らかになった点をまとめてみる。

- ① 今回は新聞記事から題材を選ぶこととした。自分の興味をもった記事を選ぶことにより、前向きに取り組める生徒が多かった。記事を選ぶ段階に生徒の個性が現れ、広い範囲から題材を求めることができた。その反面、自分の生活とかけ離れた題材を選び、一面的な意見しかもてない生徒も見られた。
- ② 第一段階の相互評価として、クラスでの発表会を行った。友達の発表を聞くことによって、自分の記事が意見文の題材として適当かどうかを判断し、記事を変更する生徒も出てきた。また、第3学年の授業では、記事に対する意見が感想にとどまっているかどうかを互いに指摘し合う場面も見られた。
- ③ 第二段階の相互評価として、各自の意見文の案（自分の言いたいこと、その根拠となる事実、今回の目標）を小グループで回し読みさせ、良かった点・疑問点・自分の意見を記入させた。この学習は、生徒たちも予想外に楽しく取り組み、感じた点をたくさん書き合っていた。良かった点を必ず書くように指導したが、その友達の励ましで書こうという意欲がさらに喚起された生徒も見られた。また、賛成、反対のそれぞれの意見を生かしながら自分の意見をまとめたり、疑問点に書かれたことを調べたりする生徒も出てきた。この相互評価によって、他の友達の意見をふまえ、根拠をもって自分の意見を組み立てようとする意識、自分の意見を更に深めようとする意識が芽生えてきたようだ。また、これまでは清書の時になかなか書き出せなかった生徒も、容易に書くことができた。しかし、時間の余裕がなく、疑問点を調べずに清書に取りかかった生徒もいた。この意見を深める段階は個人の学習に委ねるところが多く、教師の個別指導も十分とは言えなかった。
- ④ 第三段階の相互評価として、書き上がった意見文に対して自分の立場を明確にして（賛成か反対か）意見を書かせた。第二段階の相互評価と同じグループとしたため、互いの意見文がどのように仕上がったのか、また自分の意見が友達の意見文にどのように取り入れ

られているか、興味深く読み合っていた。

この相互評価の後、まとめの自己評価を行った。書き上げた意見文に自信のない生徒も友達から賛成の意見をもらい、自分の良い点に気付くことができた。自分の良かった点という項目にも全員の生徒が書き込み、自分の意見文を肯定的に受け止めていた。「疑問が残らないように書けた」「言いたいことが伝わった」などの評価が多く見られた。また、反対の意見を書かれた生徒も、「まだ反対の人がいたのもう一度考えたい」など、それをふまえた評価ができていた。しかし、相互評価で指摘されなかった点に新たに気付く生徒は少なかった。次回の目標には、「考えが組み立てられなかったので次回はじっくりと書きたい」「意見ではなく感想になってしまったので気をつけたい」「今度は構成に注意してわかりやすく書きたい」などがあり、多方面にわたる次の課題を生徒自身で発見できたことが収穫であった。

- ⑤ 仕上がった意見文に対しての教師の評価は文章により行った。それぞれの意見文に対して、共感した点を必ず書き添え、自信のもてない生徒には、特にそれを強調した。また、各自の最初の目標に触れることも心がけ、生徒自身による次の課題の発見についても大いに賞揚した。

このように、発想・選材の段階で相互評価を繰り返すことによって、普段は「何を書けばいいかわからない」生徒も、「意見をどう組み立てていくのか」「どこを説明すれば説得力のある文章になるのか」などを、友達の意見から主体的に学び取っていた。自分の作文の向上の変容が自覚できるため、文章を書くことに拒否反応を示す生徒も、授業の流れに乗り、意欲的に取り組むことができた。指導後の感想にも、「だんだんと楽しくなった」「今度は友達に納得してもらおうように書きたい」「また意見文を書いてみたい」などが多く、次回への意欲も十分に感じられた。なお今後の課題としては、次の3点が考えられる。

- ① 生徒の相互評価や自己評価の力をどう高めていくか。
- ② 教師の評価を指導過程の中でどのように組み入れていくか。
- ③ 系統的な作文指導の中にどう位置付けていくか。

生徒の自己評価の力をより高めていくためには継続的な指導が不可欠である。系統的な作文指導の中にどう位置付け、その評価の力をどう高めていくか、今後の研究で検証していきたい。なお、自分の意見を持ち、物事を客観的に見つめることのできる力、自分で課題を見つけ、主体的に取り組むことのできる力は作文指導の場面のみならず、日常のあらゆる学習活動の中で培われ、育てていくべきであることにも留意したい。

2. 音声言語指導班

(1) 研究のねらい

音声言語指導班では、自分では評価しにくい音声言語活動を客観的に見つけ、適切に自己評価する力を身に付けさせることにより、自分の学習課題に気付かせ、主体的な学習態度を育成する指導法の工夫を試みた。

研究に先立ち、アンケート調査により生徒に「話すこと、聞くこと」に関する意識調査を行った。その結果、多人数の前で話すことを好まない傾向が改めて明らかになった。その理由として、①あがってしまう、恥ずかしい（主に自意識に関する面）②どのように話したらよいかわからない（主に技術的な面）③何を話したらよいかわからない（主に内容の面）という生徒の不安やつまづきを見てとることができた。これは指導者側の問題ともつながる。つまり音声言語に関しては、教材開発の難しさ、指導の困難さ、評価の仕方のあいまいさなどから文字言語に比べ、計画的、意図的に指導しきれていない傾向がある。しかし、これからますます国際化・情報化等激しく変化する社会においては、生活に生きて働く音声言語の能力を高めることが求められている。生徒の音声言語活動に対する抵抗感を取り除き、進んで適切に「話す、聞く」能力、態度を育成することが生涯学習の基礎となるものと考えられる。

そこで、音声言語指導班では次のことを目標に研究に取り組むことにした。

- ① 多人数の前で発表する機会を意図的に設定し、音声言語に興味・関心をもたせ、その重要性に気付かせる。
- ② 発表する前の段階で、筋道を立ててしっかりと自分の考えをまとめさせる学習を充実させる。
- ③ 各自の音声言語活動を向上させ、次の学習のステップとなる適切な自己評価の力を身に付けさせる。

とくに③の評価に関連して、「音声言語活動を客観的に見つけ、適切に自己評価する力を身に付けさせる」手段として

ア 相互評価を繰り返し、その評価を自己の評価の参考とさせる工夫。

イ 教師側の決められた項目による評価表ではなく、自分で目標や評価項目を設定し、評価できる評価表の工夫。

ウ 視聴覚機器を活用し、自分の音声言語活動を振り返らせる工夫。
などに取り組んだ。

(2) 指導の実際 1〔第1学年〕

ア 教材名「命ということ」 中沢晶子著（M社）

イ 題材設定の理由

外国（ドイツ）を舞台にした小説で、「僕」の心情の変化を読み取ることで主題に迫りやすい。また、豚の解体という、一見残酷と思われる作業光景を読み取ることによって、人間の命は、実は他の動物の命によって支えられているということに気付かせることができるので、単元目標の「命の尊さに気付く」ということが達成できる。こうした物語の主題や、それについての自己の感想、「命」ということについての自分の意見をあらかじめきちんと文章化させ、それを人前で発表させることにより、音声言語能力を高めることのできる適切な教材であると考え、ここに本教材を選定した。

ウ 研究主題との関連（指導上工夫した点）

- (1) 作品の主題や感想、意見文を発表させることにより、音声言語能力を高める。
- (2) 自分の発表に対して「自己評価」させ、また「相互評価」も加えることにより、自分ではとらえにくい、音声言語活動を客観的に見つめ直す機会を与える。
- (3) その機会を通して音声言語についての自己学習課題を発見させ、主体的な学習を促す。

このような学習活動を通して、研究主題に迫ることにした。なお、研究主題に迫るうえで、具体的に、次のような学習活動を取り入れた。それを以下に列挙する。

※各項目の(1), (2), (3)は上記の関連事項の番号

- ① 感想や意見文の作成までに、読解の指導を丹念に行い、各登場人物の心情の変化、情景描写、作品の主題を押さえさせた。(学習プリント使用) ……………(1)
- ② 事前に学習グループごとに、自分の作成した発表のための文章を読み合い、学習グループごとの代表生徒を選出させた。……………(1)
- ③ 事前に発表のポイントをプリントで説明し、それに沿って発表させた。……………(1)
- ④ 発表者に、自己評価カードを参考に個人で独自に自己努力目標を設定させ、それを三点以内で述べさせてから発表させた。(努力目標設定に際して日常の各自の音声言語活動を振り返らせた。) ……………(1)
- ⑤ 「自己評価カード」(資料1)、「相互評価カード」(資料2)を用いて、自己の音声言語活動を客観的にとらえさせた。……………(2)(3)
- ⑥ 「相互評価カード」(資料2)により、相互評価を繰り返し行わせることで、注意深く人の話を聞く態度の育成を図った。……………(2)(3)

エ 指導目標

- ① 作品に出てくる人物の特徴や心情、情景を的確にとらえ、さらに作者の思い（主題）や作品に対する感想、「命」についての自分の意見をクラスで発表させることにより、音声言語能力（自己表現力）を高めさせる。
- ② その発表に際して、効果的な「自己評価」と「相互評価」をさせることにより、客観的に自己の音声言語活動を見直させる。
- ③ 音声言語の重要性に気付かせ、自ら学習課題を発見させることにより、主体的な音声言語の学習活動を促す。

オ 指導計画（全8時間）

- 《第1時》 学習目標を確認させる。全文を通読し、初発の感想をまとめさせる。
- 《第2時》 初発の感想を読み合い、読解における学習課題を設定させる。全体の構成をつかみ、簡単に内容を整理させる。
- 《第3時・4時》 第1～第3の場面について、情景、心情を読み取らせる。
- 《第5時》 第4の場面を読み、作品全体の主題をとらえさせる。
- 《第6時》 とらえた主題をきちんと文章化させる。さらに、学習後の作品に対する感想と「命」についての自分の意見を盛り込んだ文章を完成させる。
- 《第7時》 学習グループごとに、それぞれの文章を読み合い、意見交換の後、発表者2名を選出させる。また、各自の文章に朗読記号をつけさせる。
- 《第8時》（本時）前時で完成させた文章をクラスで発表させ、それを自己評価させる。また、聞き手には相互評価させることにより、自己評価の一助とさせる。

『発表会の流れ』

- ① 発表者ははじめに、「自己努力目標」を述べる。
- ② あらかじめ作成しておいた、感想・意見の文章を発表する。
- ③ 発表後、「自己評価」や「相互評価」をする。

カ 本時の指導（第8時）

A 指導目標

- ① 「命」についての自分の意見と、読後の感想を盛り込んだ内容の文章を、人前できちんと分かりやすく発表（朗読）させ、音声言語能力を高めさせる。
- ② 発表者に、発表に際しての「自己努力目標」を確認させる。
- ③ 発表後、「自己評価」・「相互評価」をさせる。

- ④ 音声言語活動に対する自己の学習課題を発見させ、主体的に話す姿勢の大切さに気付かせる。

B 学習指導過程

	指導内容	学習活動	留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> 作品全体の流れを確認させる。主題を確認させる。 本時の予定、目標を知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 小説「命ということ」の内容の再確認をする。主題を再確認する。 発表者は発表に際しての「自己努力目標」を確認する。 「自己評価カード」(資料1)「相互評価カード」(資料2)の内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシート等を参考にしながら、内容と主題を振り返らせる。 板書を基に、本時の目標を知らせる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> 各学習グループの代表発表者を一人ずつ前に出させ、感想と意見を盛り込んだ自分の文章を発表(朗読)させる。 発表後に、正しく「自己評価」「相互評価」をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表者は発表に先立って、発表に際しての「自己努力目標」を述べる。 聞き手は「相互評価カード」(資料2)を発表者の努力目標に近い内容の項目に、三つ以内に絞って○印をつける。当てはまる項目がない場合、8のその他の項目に○印をつけ、努力目標を一つに絞って評価する。 発表者は、朗読記号を参考に発表(朗読)する。 発表者は自席に戻り、「自己評価カード」(資料1)に項目ごとに自己評価を加え、5の発表後の自己の感想を書く。 並行して、聞き手は「相互評価カード」(資料2)に、自分で選んだ項目に評価を加え、最後に9の総合的な感想・アドバイスを書く。 指名された生徒は、「相互評価カード」(資料2)を見て、総合的な感想・アドバイスのみ発表する。 全員でよく聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自己努力目標」は三つ以内に絞らせる。 評価項目を迅速に見付けさせる。 聞き手には発表者に注目し、気持ちを集中して聞かせる。 聞き手は発表が終了したら、発表者に拍手する。 感想は、よかった点、反省点を必ず書かせる。 感想はよかった点を必ず含めて書かせる。 感想・アドバイスは、大きな声ではっきりと述べさせる。 発表者に、適宜メモさせる。 集中して迅速に、発表・評価をさせる。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 全体を振り返り、よかった点・改善点を考えさせ、まとめる。 人前で意欲的に話す(読む)大切さに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 発表者全員の発表が終了した時点で全体を振り返り、人前で聞き手に話の内容を正確に伝えるにはどうしたらいいか、よく考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自己評価カード」(資料1)、「相互評価カード」(資料2)を元に自分の考えをまとめさせる。

C 評価

- ① 発表者は、意見と感想の盛り込まれた内容の文章を、人前できちんと発表(朗読)できたか。
- ② 発表後の「自己評価」・「相互評価」ができたか。

(3) 指導の実際 2 [第2学年]

ア 単元名 弁論大会に向けて

イ 教材名

「弁論大会に向けて」プリント・弁論大会自己評価表(資料1)・相互評価表・ひとことカード(資料2)・弁論大会録音カセット・録画ビデオ・「表現1 生活を見直す ～事実を踏まえて～」(M社)・「表現1 分かりやすく説明する」(T社)・「表現4 感動を生き生きと ～様子をくわしく～」(G社)

ウ 単元設定の理由

全校一斉に行われる弁論大会のクラス発表会までを、国語の授業で取り組むことにした。クラス発表会は、比較的少人数での発表会になるため、互いに、発表しやすく、聞き取りやすい雰囲気を作り出しやすい。適切な指導を行えば、相互評価が効果的にはたらし、自分の発表を客観的な態度で振り返ることができる。したがって、この学習によって「自分の考えをしっかりと発表し、人の意見を的確に聞く」「自己を正しく見つめ、次の学習課題を自分で設定するための自己評価の力を高める」ことができると考え、本単元を設定した。

エ 研究主題との関連(指導上工夫した点)

音声言語は、一過性のものである。音声言語の指導において、「自己評価の力を高め、主体的な学習を促す」ためには、自分の発表を評価できるかたちで残しておく必要がある。視聴覚機器や「ひとことカード」(相互評価活動・資料2)を活用し、次のような工夫を試みた。

(ア) 視聴覚機器の活用

① テープレコーダー

クラスで弁論発表を一人一人テープに録音し、その場で手渡した。そして、家庭学習として、テープを聞いたうえで、自己評価表に感想や反省などを記入させた。生徒たちは、自分の声を、しかも、授業などの改まった場面での自分の発表を聞くという経験をほとんどしていない。自分なりにきちんと発表をしているつもりであっても、改めてテープを聞くと、どこが不自然かがわかってくる。「声の大きさ」「発音の仕方」「速さ」「間の取り方」「強弱・緩急」などを、客観的に評価することができるので、非常に有効な方法であると考えた。

② ビデオ

クラス発表会で、一人一人テープに録音するのと同時に、全員の発表をビデオに録画しておいた。これは、第4次の指導で、2度目の発表会を行う際、抽出生徒(5人)の変容をとらえる際の資料とするものである。既に全員が発表し、自己評価を終えているので、2度目の発表

会では、抽出生徒の発表を、余裕をもって聞き、相互評価し、さらに、自己評価につなげることができる。ビデオによって、主に、「発表の態度・様子」を客観的に評価することができるのである。

ただ、視聴覚機器を有効に活用するためには、ビデオカメラやテレビなど視聴覚機器の充実、放送委員の指導の徹底など留意しなければならない点がある。

(イ) 「ひとことカード」の活用

クラス発表会での相互評価の一つとして、「ひとことカード」を使用した。「ひとことカード」とは、発表者に対して、「この点が良かった」「こうするともっと良くなる」を書いてあげるB7判大のカードである。このカードを事前に発表者の人数分だけ配っておき、発表者の良い点を伸ばせるようなひとことを書くようにさせた。更に時間があれば、発表内容について励ましたり、感想を述べたりするように指導した。

発表者に対しては、どんな点に注意して発表するのかなどの努力目標を、発表の前に言わせ、聞き手が評価ポイントを絞れるように配慮した。

オ 指導目標

- ① 「身の周りを見つめて」というテーマに沿って意見を書かせる。
- ② 意見を発表（朗読）させる。また、聞き取らせる。
- ③ 自己評価・相互評価を通して、発表（朗読）の仕方・聞き取り方を向上させる。
- ④ 自己評価・相互評価に慣れさせ、次の学習課題を自分で設定させる。

カ 指導計画（全16時間）

- 第1次 「身の周りを見つめて」というテーマに沿って意見を書かせる。（取材・選材・構成・叙述・推敲・消書）……………6時間
- 第2次 発表練習（朗読の仕方の学習）・暗記をさせる。……………2時間
- 第3次 クラス発表会を行わせ、相互評価・自己評価させる。……………6時間

<クラス発表会の流れ>

- ① 発表者は、はじめに自分がどんな目標で臨むのかを述べ、その後、弁論発表する。努力目標にする項目は、「自己評価表」の1～9から3つまでとする。また、次のように述べ方のスタイルを指示しておく。

「わたしは、○番の『○○○』と○番の『○○○』と○番の『○○○』に注意して発表します。」

- ② 聞き手は、発表者が努力目標にした項目についてA・B・Cで評価する。

③ さらに、「ひとことカード」に良い点を伸ばしてあげられるようなコメントを書く。

④ 発表者は、発表後に手渡された10分テープを家で聞き、「ひとことカード」を参考に
して、「自己評価表」に記入してくる。

第4次 クラス発表会終了後、抽出生徒（5人）について、2度目の発表をさせ、自己評価・
相互評価させる。……………（本時）1時間

第5次 「弁論大会に向けて」で学習したことをまとめさせる。……………1時間

キ 本時の学習（第8次・第15時）

(ア) 指導目標

- ① 目的意識をもって、弁論発表をさせる。
- ② 自己評価・相互評価に慣れさせる。
- ③ 相互（他者）評価をすることによって、自己評価の力を高められることに気付かせる。

(イ) 指導過程

	指導内容	学習活動	指導上の留意点
導 入	・前時の学習報告をさせる。	・前時の学習報告をする。	・ポイントを押さえ、 分かりやすく報告させる。
展 開	①2回目の弁論発表をし、自己評価させる。 (抽出生徒について)	・録画ビデオを見て、1回目の発表の様子を思い出す。 ・1回目の発表の際に自分の目標にした点と、「自己評価表」での反省点を述べる。 ・2回目の弁論発表をする。 ・自己評価する。	・生徒抽出の基準は次のとおり。 ①弁論のクラス代表 ②自己評価が適切にできていた生徒 ③自己評価があまり適切でなかった生徒 ④個人目標別
	②2回目の弁論発表を聞いて、相互（他者）評価させる。	・発表生徒の、1回目の目標とその後の反省点をふまえながら、発表を聞く。 ・相互評価表を書く。	・自分の目標を明確にして発表させる。 ・発表者がどんな点に注意しているのか確実に聞き取らせる。 ・相互評価表を書くことで、自己評価がより適切にできるようになることに気付かせる。
	③指導者からの一言。	・適切な助言を聞く。	
終 結	①～③を5人分行う。 ・本時のまとめと次時の予告。		

(ウ) 評価

- ① 目的意識をもって、弁論発表をすることができたかどうか。
- ② 自己評価・相互評価に慣れることができたかどうか。
- ③ 相互評価をすることによって、自己評価の力を高められることに気付き、自己の学習課題を設定することができたかどうか。

ク 授業資料

弁論大会自己評価表 (資料1)

評価項目	A B C	ひとこと
① 声の大きさは その場によさわしいかどう か	B	自分やけだ！いや、ちゃんと 出していかつたりだ。
2 発音が はつきりしているか	C	ちゃんと発音はきいていはい るか、か、か。
③ 速さは ちょうどよいか	C	緊張して、ひびくか、か、か、 して、か、か、か、か、か。
4 間を考えた 発表になっているか	B	間がはなれて、いか、か、か、 れて、いか、か、か、か、か。
5 内容にふさわしい 強調・重音がしているか	C	強調も、よ、よ、よ、よ、よ、 か、か、か、か、か、か。
6 態度が、不自然に 上がった下がり下がりしてい ないか	A	よ、よ、よ、よ、よ、よ、 つ、つ、つ、つ、つ、つ、 だ、だ、だ、だ、だ、だ、
7 話し言葉として 不自然ではないか	B	少し不自然なところか あ、あ、あ、あ、あ、あ、 か、か、か、か、か、か、
8 言い間違えたり、 ひどくつかえたりしていないか	C	もう一度やり直さないと、 も、も、も、も、も、も、 か、か、か、か、か、か、 か、か、か、か、か、か、
9 発表の態度は どうであったか	A	お、お、お、お、お、お、 か、か、か、か、か、か、 か、か、か、か、か、か、 か、か、か、か、か、か、
10 発表した内容について (考えがまわり たり、付け足したりしたことなど) 『夏の日』出		
11 発表の練習テープを聞いての感想 (今後の目標)		

弁論大会十八歳 白口「自己評価表」
*自分が目標にした項目の欄に○をつけてよう。

番・氏名

ひとことカード (資料2)

<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>	<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>	<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>
<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>	<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>	<p>ひとことカード ()</p> <p>〜文章がよかった。それと、読んだときの感 度がかかった。</p>

(4) 研究のまとめ

音声言語指導班では、自分では適切に評価しにくい音声言語活動を客観的に見つけ、適切に自己評価し、次の自らの課題を発見し、主体的に学習に取り組む態度の育成に主眼を置き、研究に取り組んできた。検証授業を行った成果・反省を以下にまとめてみる。

① 指導の実際 1

この実践を通しての生徒の変容としてあげられることは、正しく効果的な自己評価、相互評価の仕方を学習したことにより、自己の音声言語活動を客観的に見直せるようになったことである。その結果、生徒が音声言語の重要性に気付き、自ら音声言語に関する学習課題をもてるようになった。

その後の日常生活に見られた生徒の変容を列挙する。

- ・効果的に自己評価を繰り返させたことにより、人前での発表に際しての抵抗感・恐怖感が薄れ、意欲的かつ積極的に人前での発表に臨もうとする態度が身に付いてきた。
- ・授業中の発言、朝礼などでも臆せず堂々と話せるようになってきた。
- ・相互評価を繰り返したことにより、人の発表・発言を真剣に聞く態度が身に付いてきた。
- ・優れた発表ができた時に生徒が素直に喜びの表情を見せるようになった。

② 指導の実際 2

テープレコーダーやビデオの視聴覚機器を活用したことにより、生徒は自分の音声言語活動を客観的に評価できた。自分ではきちんと発表していたつもりであっても、「声が小さかった」「発音がはっきりしなかった」「感情がこもっていなかった」「アクセントの変なところがあった」「強弱がついていなかった」「下を向いてしまった」など、発表後に適切に自己評価できている。また、ひとことカードによる相互評価でも、クラスの仲間に温かく指摘されたことが、「語尾が聞き取りにくかったり、速かったりしてしまったので、次はこの点に気を付けたい」など、前向きな自己評価につながっている。

テープレコーダーやビデオによる自己評価活動と、ひとことカードや相互評価表などによる相互評価活動を組み合わせ活用することにより、「自己評価」の深まりが可能となり、次の学習課題を自分で設定できる契機となったことが、この実践の成果である。

IV 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

国語教育の今日的課題や生徒の実態から、自己評価の力を高めていくことが大切であると考え、表現学習を通して、学ぶことへの意欲を喚起し、成就感を体得させ、自ら学ぼうとする力を育てるための指導法の工夫について実践的に研究を進めてきた。

本研究では、自己評価の力を「自分のものの見方や考え方を、他の者の評価をふまえながら振り返り、確かめ自信をもつことで、さらに次の課題の解決へと向かわせることのできる能力と態度」ととらえた。また、この考えに基づき、「主体的な学習を促す指導」を「自ら課題を設定し、解決していこうとする態度の育成」ととらえて、表現の領域から、作文指導、音声言語指導の2つの指導場面を取り上げた。

研究の結果、明らかになったことは以下のとおりである。

〔作文指導班〕

- ① 自分の興味をもった記事を選ぶことにより、前向きに取り組める生徒が多かった。題材を選ぶ段階で生徒の個性が現れ、広い範囲から題材を求めることができた。
- ② 三段階の相互評価・自己評価の場を設定することにより、生徒相互に活発な意見交換が行われ、他者の評価や作文を参考にしながら、自らの作文をよりよくしようとする意欲が高まった。

〔音声言語指導班〕

- ① 効果的な自己評価、相互評価の仕方を学習したことにより、自己の音声言語活動を客観的に見直せるようになった。その結果、生徒が音声言語の重要性に気付き、自ら音声言語に関する学習課題をもてるようになった。
- ② 視聴覚機器を活用したことにより、生徒は自分の音声言語活動を客観的に評価できた。また、前向きな自己評価ができるようになった。

2 今後の課題

- (1) 表現学習における評価の場面の設定の仕方、自己評価と相互評価の有効な組み合わせ方、それらの学習指導への生かし方等については、今後とも実践を通して研究する必要がある。
- (2) 表現学習における多様な指導方法の開発、特に音声言語指導における効果的な指導内容、指導の在り方等については、今後、研究・実践の蓄積が必要である。
- (3) 視聴覚機器の活用、チーム・ティーチングの導入等、生徒の学習意欲を喚起し、自己評価の力を高める指導方法を工夫する必要がある。